

マルコによる福音書15章42-27節 「確かに死なれたイエス」

1A 議員ヨセフの願い出 42-43

1B ヨセフの勇氣 42

2B 御国を待ち望む者 43

2A 百人隊長からの確認 44-46

1B ピラトの驚き 44

2B ローマによる確認 45

3B 用意された墓 46

3A 埋葬の準備 47

1B 石の裏にある死

2B 石が転がされる希望

本文

マルコによる福音書 15 章を開いてください。私たちの受難週の学びは、イエス様の埋葬に入ります。本文を読みましょう。「42 さて、すでに夕方になっていた。その日は備え日、すなわち安息日の前日であったので、43 アリマタヤ出身のヨセフは、勇氣を出してピラトのところに行き、イエスのからだの下げ渡しを願い出た。ヨセフは有力な議員で、自らも神の国を待ち望んでいた。44 ピラトは、イエスがもう死んだのかと驚いた。そして百人隊長を呼び、イエスがすでに死んだのかどうか尋ねた。45 百人隊長に確認すると、ピラトはイエスの遺体をヨセフに下げ渡した。46 ヨセフは亜麻布を買い、イエスを降ろして亜麻布で包み、岩を掘って造った墓に納めた。そして、墓の入り口には石を転がしておいた。47 マグダラのマリアとヨセの母マリアは、イエスがどこに納められるか、よく見ていた。」

皆さん、お祈りありがとうございます。トルコへの旅行は豊かに祝福されました。トルコは、ローマ時代の小アジアと呼ばれるところであり、使徒パウロの宣教の足跡を辿りました。また、ペテロも足を踏み入れており、ヨハネは晩年、エペソを拠点に活動していました。パウロと共に動いたテモテも小アジア出身であり、ルカもそうでしょう。イスラエルは教会が誕生したところですが、トルコは教会が揺り籠のようにして育ったところです。

団長は、ジェイ・マカール(Jay McCarl)というカルバリーチャペルの牧師ですが、彼は聖書的背景についての本も出しているような方です。そして今、「その話の背景(Behind the Story)」という本を執筆中です。それは、私たちが聖書を読む時に、その字面だけを辿れば読み間違ってしまうので、その背景を知る必要があるということです。その背景を知れば、聖書に書かれていることは、決して難しいことではなく、素朴な、無教養の人でも理解できるように書かれているというこ

とでした。



例えば、この写真ですが、かつてのコンスタンチノーブル(現イスタンブール)の競馬場にある記念碑ですが、ローマ皇帝が月桂樹を競馬で勝利した者に渡す場面が彫られています。ここでジェイさんは、ピリピ 3 章 14 節を取り上げていました。「キリスト・イエスにあって神が上に召してくださるという、その賞をいただくために、目標を目指して走っているのです。」これは、先週の礼拝で大城勝さんが説教した箇所ですね。ローマ皇帝が、競馬場で優勝した者に賞の冠を与えるのですが、映画「バン・ハー」の主人公がそうであったように、階段を上がって、上にいる皇帝から冠を授与されます。ピリピの人たちがパウロから手紙を受け取った時に、「神が上に召してくださる」という言葉について、上に召すということを手紙で理解できました。ローマ皇帝が上に座っているところに、階段を上がって行って賞を受けるのと同じように、まことの王であるキリストから、天に引き上げられて賞を受けるために、その目標を目指して信仰の競走を走り抜きなさいということなのです。聞いている人々には、とても分かり易い言い回しなのです。

1A 議員ヨセフの願い出 42-43

実は、私たちが先に読んだイエス様の埋葬の場面にも、その背後にある話があります。「なんで、そんな急いでイエスの死体の下げ渡しを願ったのか？」ということです。私たちは、人が死んだら

そのまま葬るのは当たり前だと思いがちです。けれども、総督ピラトが驚いていましたね。そして、わざわざ百人隊長にも死んだことを確かめさせています。埋葬させることは、実は頻繁に行われていなかったことなのです。

それは私たちが、当時のローマの十字架刑で行われていたことを知らないからです。十字架刑は、ただむごい殺し方をするだけでは済みませんでした。死んでからもそのまま磔にしておいて、腐敗させ、猛禽や獣が食べるに任せるところまでさせました。そのようにして、死んだ後も全く報われない姿を見せて、ローマに反逆したりする罪が重いことを見せしめにしたのです。

1B ヨセフの勇気 42

ところが、ヨセフが勇気を出して、下げ渡しを願いました。ユダヤ人は、埋葬を大切に扱いました。どんな人であっても、丁重に葬ることは自分たちの義務だと思っていました。ある時は、命をかけてでも死体を探し出して、墓に葬ることをします。かつてイスラエルの王サウルがペリシテ人との戦いで死に、彼の体がベテ・シェメシュという町の城壁にさらしていたところ、ヤベシュ・ギルアデの住民がそこから取り下ろして、火葬して、お骨を自分たちの町で丁重に葬りました（Iサム 31:10-13）。ペリシテ人によって殺されるかもしれないのに、死体を引き取りに来たのです。

ここでヨセフも同じです。ローマ人には問題にならなかったことが、ユダヤ人には問題になりました。「さて、すでに夕方になっていた。その日は備え日、すなわち安息日の前日であった」とあります。夕方とは午後 6 時頃ですが、日没になると安息日になります。備えの日であり、あらゆる労働や働きをやめなければいけません。死体の埋葬も仕事に数えられます。また、申命記 21 章 23 節には、木につるされたものは呪われているので、土地を汚さないために日没前に取り下げなければいけないことが書いてあります。イエス様が息を引き取られたのは午後 3 時です。残り少ない時間で、急いで墓に入れなければいけません。でも、しばしば、十字架に付けられた犯人は丸一日、ある時は二日、生きている時もあるぐらいです。けれども、アリマタヤのヨセフは、イエス様が確かに息を引き取られているのを確認していました。それで下げ渡しを願っています。

彼は、「勇気を出してピラトのところに行き」ました。なぜなら、その罪状書きには、「ユダヤ人の王」と記されているからです。ローマ皇帝に反逆したユダヤ人の王という罪でイエス様が死刑になったのですから、その仲間だと見られることは必至で自分の立場も、命さえ危ういことです。けれども、ヨセフは正しいと思うことをしました。弟子たちは逃げて、総督ピラトはイエスが無罪だと知っていたのに十字架刑に処しました。それらはみな、恐れてそうしたのです。恐れから、自分が正しいと思うことをできませんでした。私たちはどうでしょうか？恐れから、正しいと思うことができないことはあるでしょうか？ヨセフは、勇気を出してピラトのところに行きました。一人一人が勇気を出して、主に言われていることに従うことによって、神のご自分の働きを前進させます。

2B 御国を待ち望む者 43

ヨセフは、「アリマタヤ出身」とあります。これは、預言者サムエルの出身の町「ラマ」ではないかと言われています。エルサレムから北東に 8 キロぐらいのところですよ。そして、「有力な議員で、自らも神の国を待ち望んでいた」と言っています。有力な議員とは、ユダヤ人の最高機関であるサンヘドリンの一員であったと考えられます。そのような有力な議員で、もう一人、イエス様の隠れ弟子であった人がいました。ニコデモですね。夜に独りでイエス様のところに行き、神から来られた教師であると告白しましたが、イエス様は新しく生まれなければいけないと言われました。そのニコデモも、ヨハネ 7 章 51 節によると、イエス様を隠れて信じていたことが分かります。そしてニコデモも大量の没薬を持って来ている様子がヨハネ 19 章に書いてあります。ヨセフもニコデモも、自分たちが属しているサンヘドリンが、イエス様を不当に死刑に定めたことをよく知っているのです。それで、弟子たちもおらず、女たちも遠くから眺めている中で、自分たちが勇気を出したのです。

自分たちの立ち位置が危ぶまれる時に、それでも勇気を出したのは、「自らも神の国を待ち望んでいた」とあるとおりです。イエス様が、お生まれになった時にも同じように、シメオンという人がイスラエルが慰められることを待ち望んでいて、それで幼子イエスを見て、神をほめたたえました。神の国を待ち望むとは、どういうことか、これで分かります。人々が、見向きもしないような時に、それでも進み出て、神のなされていることを見つめている人であります。過越の祭りの六日前に、女が高価な香油をイエス様に注いだ時に、そこで弟子たちが激しく憤りましたが、イエス様が間もなく死なれることを知って、埋葬の準備のためにそれを行ったのです。

人はとかく、自分の損得で動いてしまいます。自分にとって都合が良ければ行動に移すし、そうでなければ行動に出ません。けれども、何か損になったとしても、神の国を第一に求めれば、必ずイエス様は満たして下さることを約束されています。「マタ 6:33 まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます。」まず神の国を求めれば、これらのものは加えて与えられるのです。これが、正しく生きること、真っ直ぐに生きることです。

2A 百人隊長からの確認 44-46

1B ピラトの驚き 44

こうしてヨセフが下げ渡しを願い出しましたが、ピラトの反応を見てみましょう。「ピラトは、イエスがもう死んだのかと驚いた。」驚いています。先に話しましたように、十字架に磔にされた者たちの中には、一日、二日、生きていてもおかしくない場合もあります。けれども、イエス様は十字架に付けられてから、まだ6時間から9時間しか経っていなかったのです。ですから、驚きました。これまで、マルコの福音書には、「驚いた」という言葉が幾度も出て来ることを思い出してください。イエス様のなされることは、私たちの日常を超えます。私たちがいつもしているところに、そうではないものが入ってくるようにして、ご自身の働きを行われます。ここでは、イエス様が敢えてご自身で息を引き取ったというところに、大きな意味があります。「15:37 しかし、イエスは大声をあげて、息を引き

取られた。」とありました。イエス様は全てのことを、十字架上で死なれるところにおいても、ご自身の意志で、自ら進んで行われました。いやいやながら、やむを得ず死んだのではなく、私たちの罪の負い目のために、自ら進んで死なれたのです。

2B ローマによる確認 45

そして、45 節に「百人隊長に確認すると、ピラトはイエスの遺体をヨセフに下げ渡した。」とあります。百人隊長は先に、「15:39 この方は本当に神の子であった。」と言った本人です。ピラトは、確実に死んだことを確認しなければいけませんでした。死刑にしたのに生きていたということであれば、とんでもない責任問題になります。確実に死んだことを、確認しなければいけません。百人隊長は、何度も何度も、十字架によって死んだ者たちの確認作業をしていました。ですから、死体確認作業の言わばプロです。こうして、イエス様は必ず死んだということが確認できたのです。

イエス様が死んでいる・確認しすぎてもよいぐらい、大切な確認です。イエス様が死んでいないのに息を吹き返したのであれば、それは蘇生です。甦り、また復活ではありません。死んだのに、生き返ったからこそ、そこにまことの命があり、私たちはその復活の希望によって、新しく生まれました。「I ペテ 1:3 神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちを新しく生まれさせ、生ける望みを持たせてくださいました。」

あまりにも数多くの方が、自分の内に可能性を見出そうとします。けれども、聖書ははっきりと、「私たちは罪の中で死んでいた」と宣言しています。「エペ 2:1 あなたがたは自分の背きと罪の中に死んだ者であり・・・」罪の中に死んでいるとのこと。こういった救命士のための話があります。溺れている人を救出する時に、その人がもがくのを止める時まで待たないといけないというのです。そうでなければ、生きようとして救命士にしがみつき、どちらも溺れてしまう惧れがあります。それで、もがいて沈みそうになるまで待つのだそうです。

それとイエス様による救いは似ています。自分のうちに何か良いものがある、可能性があると思っているうちは、信仰を持っているようで、どこかで苦しみあがいてしまいます。けれども、自分が本当に罪の中で死んでいたのだということを知り、ただ神の憐れみによって救われたのだということを出さなければ、罪の中で死んでいるのに、あたかも自分が死んでいないかのようにして這い出してこようとしてしまうのです。助けられる、救われる前に、自分が自分では救いようのない人間なのだということを知る必要があります。

聖書には、死によって救いをもたらす例が数多くあります。ノアの箱舟がそうですね。多くの人々が水によって神の裁きを受けて、死にました。けれども同じ水によって、箱舟の中にいる人々や動物は生きました。そして、出エジプトもそうですね。エジプトの軍隊は紅海の中で死にました。その同じ紅海を渡って、イスラエルの民は救われました。そこに、どちらかに付くことはないのです。神

の救いの側に付くか、あるいは罪の中で滅びるかのどちらかなのです。

3B 用意された墓 46

そして 46 節に、「ヨセフは亜麻布を買い、イエスを降ろして亜麻布で包み、岩を掘って造った墓に納めた。そして、墓の入り口には石を転がしておいた。」とあります。ヨセフは、丁重にイエス様を葬りました。亜麻布は購入して、真新しいものを用意していました。そして墓ですが、裕福な人でないと、このような、岩を掘って作る墓は持てません。貧しい人は、地面に穴を掘った竪穴なのですが、裕福な人が横穴を掘れる岩のところを購入して、そこに埋葬します。

そしてどのように埋葬するかといいますと、遺体を安置します。その前に香油や香料を塗ります。それが安息日の前にできなかったので、日曜日の夜明けに婦人たちが、再び墓に向ったのです。そして、一年ぐらいかけて腐敗させ、骨だけになります。それを骨箱の中に入れます。それを繰り返すので、再び家族で人が死んだら同じ墓に安置することができます。そしてこの時に、イザヤが約 700 年前に預言したことが成就します。「53:9 彼の墓は、悪者どもとともに、富む者とともに、その死の時に設けられた。」富む者と共に、墓が設けられたということが成就しています。

3A 埋葬の準備 47

そして最後、「マグダラのマリアとヨセの母マリアは、イエスがどこに納められるか、よく見ていた。」とあります。イエス様がどこに納められたのか、この二人のマリアはじっくりと見ていました。そして石が転がされました。ここまでしっかり確認したのですから、弟子が誰かがイエス様の遺体を盗むこともできませんでした。マタイの福音書によれば、ここにローマの番兵が付いています。

1B 石の裏にある死

これで、言わばイエス様についての、いろいろな希望が封印されました。イエス様は、ピリポに対して、「わたしを見た者は、父を見たのです。」と言われました。まことの神を完全な形で表しました。「ヨハ 1:14 父のみもとからこられたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。」恵みとまことに満ち方を、人々は嫌がりました。葬り去りました。

そして、まことの宗教といいますか、神との関係も葬り去られました。イエス様は、「ヨハ 1:13 だれも天に上った者はいません。しかし、天から下って来た者、人の子は別です。」と言われました。自分たちの可能性を求めて、向上し、神に達しようとするのが普通、宗教の考えることです。けれども、有限のちっぽけな人間が神に到達することは決してできないことを知っておられるから、神が一方向的に憐れんで、ご自分が人となることによって近づいてくださいました。天から下って来てくださったのです。そのことで、ユダヤ人宗教指導者は怒りました。群衆も理解しませんでした。それで殺して、葬りさったのです。

さらに、贖い、救われる希望も死んでしまいました。イエス様が数多くの救いの業を行われました。人がどうしようもなくなっているところに、手を伸ばして癒されました。らい病人、悪霊に取りつかれた人、死んだ人までを生き、癒されました。ところが、この方が死んでしまいました。弟子が、「ルカ 24:21 私たちは、この方こそイスラエルを解放する方だ、と望みをかけていました。」と言いましたが、イスラエルを救ってくださる、贖ってくださると思っていたのに、それが粉々に砕けてしまいました。けれども、実は、その救いはまさに彼らががっかりしている、十字架の死によって実現しているということを、知る由もありませんでした。

このように、希望が死んでしまいました。救い主、メシアが来るという約束、その希望が終わってしまったのです。

2B 石が転がされる希望

このように、石が転がされたその後ろには、いろいろな希望が死んでしまいました。ところが、次にその石が転がされて開いているのです。希望は死んでいませんでした、実は、死を通してでなければ、この希望が生きる希望になりませんでした。死んだからこそ、生き返る希望があります。私たちには、通らなければいけない試練や苦難があります。しかし、そこでいろいろな意味での死を経験します。しかし主は、灰になってしまったようなところから、廃墟になってしまったようなところから、新たな命を芽吹くようにされようとしています。